様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２２４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４５３

研究課題名（和文）統合失調症の「家族による家族学習会」の持つ意味と精神障害者家族会に与える影響

研究課題名（英文）The significance that the Family-Led Peer learning Program on schizophrenia has and the influence that the program on the schizophrenia has upon the family association

研究代表者
横山　恵子（YOKOYAMA, Keiko）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：８０３２０６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、統合失調症の「家族による家族学習会」が担当者や参加者家族に与える影響、さらに家族会に与える影響を調査し、家族学習会の持つ意味を検討した。
担当者家族は、支援側に回ることで、自信を取り戻し、リカバリーの道を前進していた。参加者家族は、担当者家族に、希望や回復モデルを見出し、終了後は家族会に入会していた。家族学習会は、会員の増加や若返りなど、家族会の活性化につながるプログラムであると考える。

研究成果の概要（英文）：This study examined the following three points: 1)the influence that the Family-Led Peer Learning Program on the schizophrenia has upon the facilitator and its participants: 2)the influence that it has upon the groups: 3)the significance that the program by the groups has.
The facilitator took on the role of supporter and, by doing this, they regained their self-confidence and could follow the road to recovery. The family who participated in the Peer Learning Program found the hope and their recovery model through the family facilitator for the program, and they became members of the family groups, soon after the program. This program is one of the programs through which the increase of the members and the change of generation and the vitalization of the groups take place.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神障害者　家族支援　家族学習会　家族会

１．研究開始当初の背景

精神科領域においては、歴史的に病気の発症や増悪の原因が家族にあると考えられ、家族への治療や看護が行なわれてきた。しかし、1990 年以降、統合失調症の発病、再発は患者の持つ精神生物学的脆弱性や環境要因に関連があるとする「脆弱性－ストレスモデル」が提唱され、家族の批判的コメント、敵意、情緒的巻き込まれの感情表出（EE：expressed emotion）が患者の再発に影響するという理論を背景に、専門家による統合失調症家族を対象とした「心理教育」が行なわれるようになった。そのような中、アメリカや香港では専門家ではなく、家族が家族に教育するという、新しい取り組みが行われている。アメリカでは、1991 年に精神障害者家族会連合会（NAMI）による「Family-to-family Education Program（FFEP）」、香港では、2000 年に「Family Link」が開発され、それぞれ広まっている。

日本では、2007 年度から、地域精神保健福祉機構（コンボ）が、統合失調症の「家族による家族学習会（以下、家族学習会）)」と呼ばれる、家族教育プログラムの普及事業を開始している。これは、精神障害者家族会（以下、家族会）の会員 3～6 人が担当者となり、保健所や医療機関などからの紹介を受けて、家族会につながっていない家族 10 人程度を集め、1 回 3 時間、5 回を 1 コースとして行うものである。専門家の「心理教育」との違いは、患者の再発予防ではなく、家族のエンパワメントに目標を置いていることである。統合失調症の「家族による家族学習会」の今後の普及に向けて、担当者家族や参加者家族に与える影響、さらに家族会運営に与える影響を明らかにすることで、「家族学習会」の持つ意味や普及にあたっての課題、日本の家族会の将来のあり方を検討したいと考えた。

２．研究の目的

統合失調症の「家族による家族学習会」が、担当者家族および参加者家族の双方に与える影響、さらに家族会運営に与える影響を明らかにし、「家族学習会」の持つ意味と普及にあたっての課題を検討する。

３．研究の方法

（1）研究デザイン：質的帰納的研究

（2）データ収集期間

2012 年 8 月～2013 年 7 月

（3）研究協力者

①家族学習会の担当者27名

家族学習会を実施した担当者家族を対象とする。2010 年度に実施した家族学習会のうち、7 つの家族会の担当者家族。

②家族学習会の参加者 8 名

2012 年度に実施した家族学習会のうち、企画委員の家族が所属する 2 つの家族会が実施した家族学習会の参加家族。

③家族学習会の推進者である支援者 4 名

家族学習会の企画委員であり、支援者である推進者。

（4）データ収集方法

半構造的なグループインタビューを 120～180 分間行った。インタビュー内容は了解を得て録音し、逐語録を作成。逐語録を繰り返し読み、内容を抽出しコード化し、意味内容の類似性と相違性に従ってカテゴリ化した。

（5）倫理的配慮

研究協力者には研究の主旨と方法を文書と口頭で説明し、同意書にて承諾を得た。研究協力の辞退によって不利益になることはないこと、個人や家族会などが特定されないこと、プライバシーの保護には十分配慮すること、得られたデータは研究目的以外には使用しないことを説明した。埼玉県立大学倫理委員会の審査を受け、承認を得た（第 23023 号）。

４．研究成果

（1）家族学習会担当者の経験

研究協力者 27 名の内訳は、男性 10 名、女性 17 名、年齢は 50 歳代 8 名、60 歳代 5 名、70 歳以上 14 名だった。続柄は、親 23 名（母親 16 名、父親 7 名）、兄弟姉妹 2 名、義妹 2 名だった。全員が家族会の役員であり、平均 11.3 年の活動歴があった。担当者経験回数は、平均 2.5 回（範囲：1-6 回）であった。本人の疾患は、統合失調症が 22 名、発達障害 4 名、うつ病 1 名であった。

家族学習会の担当者としての経験は、本人の発病からの困難と後悔の負の体験から始まるプロセスだった。そのプロセスは、【困難と後悔の負の体験を抱える】【負の体験を聞いてもらい、心が満たされる】【仲間とともに体験共有を支援する】【体験共有を重ね、自分を理解・肯定する】【自分の体験に価値と役割を見出す】の 5 つの段階を経ていた。

明らかになった担当者が経験するプロセスは、セルフヘルプ・グループのメンバーの変化プロセスと共通する部分が多く、家族学習会は、家族会と類似性の高いプログラムであると考えられた。また、担当者という支援する側に回ることで、共感に動機づけられ、自分と同じような境遇にある他の家族を支援したいという気持ちが引き起こされていた。最初は、困難と後悔を伴う負の体験だったが、家族学習会の担当者役割を通して、人を助けることのできる価値ある体験へと変化していた。体験をした者だからこそできる自分の社会的役割を見出した家族は、リカバリーの道を前進していた。よって、家族学習会は、担当者の家族としてのリカバリーを促進する可能性があるプログラムだと考えられた。

（2）家族学習参加者の経験

研究協力者 4 名の内訳は、男性 1 名、女性 3 名であり、年齢は 50 歳代が 1 名、60 歳代が 1 名、70 歳以上が 2 名だった。続柄は全員が親であり、本人は 20 代後半から 40 代前半で、その疾患は全員が統合失調症であった。

参加者の家族学習会の経験には、【家族学習会の特徴】【家族学習会における学びと気づき】【同じ家族が担当者であることの意味】【生活や本人とのかかわりへの好影響】の 4 つのカテゴリが見出された。

【家族学習会の特徴】では、家族会の活動と比較して、＜小グループで体験を聞きあえる場＞＜話しやすい進行＞＜テキストに沿って学ぶ＞＜対応の仕方が取り上げられる＞と理解されていた。

【家族学習会における学びと気づき】では、テキストに沿いながら、＜自分自身の話をする＞機会を得て、＜自分の経験、その経験の大変さを振り返る＞ことができ、＜他の家族の経験やテキストからの知識で、自分自身の家族の病気や経過を今まで以上に把握できる＞と感じていた。

【同じ家族が担当者であることの意味】では、病気の家族がいるというイメージがなく、明るい担当者の姿を目にして、参加者は「こういう生き方をしたい」と思っていた。参加者は、担当者を家族としての回復のモデルとして眺め、自らも変化するための具体的な目標のような存在としていた。

【生活や本人とのかかわりへの好影響】では、＜他の家族の話を聞いて、自分もやってみようと思う＞といった行動面の変化だけでなく、「本人と共に生きていると感じる」というように、＜本人に対する思いが変わる＞経験をしていた。＜本人とのかかわりが変わり、本人も変わる＞と述べていた。

家族学習会の参加者の経験から、家族学習会のプログラムが持つ特性や効果が明確にされた。

（3）家族学習会推進者の経験

研究協力者は、保健師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士の有資格者である 30 代～50 代の専門職４名である。全員が、家族学習会に関わる以前に、15 年～30 年の家族支援および家族会支援の経験を持っていた。

家族学習会では、家族が、自らの体験に真に価値があることに改めて気づき、力をつけ、自信をつけ、次第にリーダーシップを発揮していった。推進者はその姿に、家族の力を感じ、共に家族学習会の成功を喜ぶのだが、家族との良好なパートナーシップ形成に至る前に、一時的に、自らの専門性や役割に疑問を感じ、葛藤を感じていた。これは、家族学習会は家族が中心の活動であるため、例えば研修会の講師や、新しく家族学習会を開始する家族会のアドバイザーとしての支援などの役割を、早い時期から積極的に家族に担ってもらうようにした結果、もともと支援者としての専門性を有していた推進者が、自らが前に出て「家族を支援する」という役割がなくなったためと考えられた。しかし、推進者がこの葛藤を引きうけ、出来ることを見つけながら活動を継続することで、家族と推進者は対等な関係になり、相互に影響し成長でき、価値あるチームへと変化していった。家族学習会は、家族と推進者の関係、本来的なパートナーシップのあり方を体験させてくれる貴重なプログラムである。家族と推進者がチームを形成するには、両者が共に歩み、時間をかけて共に取り組むことが必要であると考えられた。

（4）家族学習を実施した家族会の経験

家族学習会の担当者 27 名のデータ分析から行った。研究協力者は 50～80 代の 27 名の家族であり、続柄は、母親 16 名、父親 7 名、兄弟姉妹 2 名、親戚 2 名であった。親 23 名（母親 16 名、父親 7 名）、兄弟姉妹 2 名、義妹 2 名だった。全員が家族会の役員であり、平均 11.3 年の活動歴があった。

家族学習会に取り組んだ担当者や家族会の変化は、『家族学習会に取り組む動機』から始まり、『担当者研修会で学ぶ』『家族学習会を経験した担当者の変化』を経て、『家族学習会による家族会の変化』に至るという 4 段階が見出された。

精神障害者家族会は全国的に高齢化し、低迷しているのが現状であり、家族会の活性化は共通した課題である。家族学習会に取り組んだ家族会は、家族学習会にその活路を求めていた。衰退した家族会の多くは、《自分の経験を話す機会のない家族会》であり、家族学習会を通して、セルフヘルプループとしての家族会の基盤である相互支援の機能を、身をもって体験していた。家族学習会は複数の家族が担当者となって行う体系的な学習プログラムである。一人に負担がかからないグループ運営は、【家族会のチーム力の向上】に繋がったと考える。また、担当者家族は、家族学習会で精神障害者家族としての《社会的役割を見出》していた。これは、家族自身のリカバリーとも考えられ、支援される立場から支援する立場への役割の転換が、家族をエンパワメントし、【家族会の活性化】につながったと考える。さらに、家族支援という【これからの家族会の役割を見出す】機会となったと言える。

家族学習会は、衰退した家族会にとっても、活発な家族会にとっても、大きな変化を与えるプログラムである。家族学習会によってチーム力が付き、組織が変化していくプロセスが見出された。これまで、作業所作りや運営など当事者支援に力を注いできた家族会であるが、今後は、家族学習会という家族支援を通して、新たな活動を広げていくことができると考える。

以上、家族学習会担当者の経験、参加者の経験、家族学習会を実施した家族会の経験か分析から、孤立している家族同士が出合う場として、家族学習会が重要な機能を持つこと、家族学習会は家族会活動の中に位置づけられるものであることが改めて確認された。

家族学習会を普及するためには、担当者研修会の実施や、「実施マニュアル」の整備、「ア

ドバイザー」制度など、継続的に実施できるシステムの構築が必要である。また、家族学習会の普及には、根拠となるエビデンスが必要であり、これからも効果評価につながる実践的な研究が求められていると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 蔭山正子、横山恵子、中村由嘉子、大島巌、精神障がいの家族ピア教育プログラムの普及　「家族による家族学習会」のケーススタディ、 日本公衆衛生雑誌、査読有、Vol.61、No.5、 2014、221-232
② 蔭山正子、横山恵子、小林清香、飯塚壽美、精神障がい者家族のリカバリーを支える家族ピア教育プログラム、家族看護、査読無、Vol.12、 No.01、2014、148-153
③ 横山恵子、小林清香、飯塚壽美、蔭山正子、精神障がい者の家族を支える家族ピア教育プログラム＜第２報＞「家族による家族学習会」の実際と今後の可能性、コミュニティケア、査読無、Vol.16、No.01、2014、66-69
④ 蔭山正子、飯塚壽美、小林清香、横山恵子、精神障がい者の家族を支える家族ピア教育プログラム＜第1報＞必要とされる背景とプログラムの内容、コミュニティケア、査読無、Vol.15、No.14、2013、65-67
⑤ 蔭山正子、横山恵子、精神疾患を患う人の家族ピア教育プログラムにおける支援技術、精神障害とリハビリテーション、査読有、Vol.16、No.1、2012、62-69

〔学会発表〕（計５件）

① 蔭山 正子、横山 恵子、家族ピア教育プログラムにおいて進行役の家族が変化するプロセス、日本地域看護学会第 17 回学術集会、宇都宮、2014.8.3
② 横山恵子、蔭山 正子、「家族による家族学習会」に取り組んだ精神障害者家族会の変化、日本精神保健看護学会第 24 回学術集会、横浜、2014.6.22
③ 蔭山 正子、横山 恵子、精神障がい者家族による家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」の質的検討-中心的な家族が考える核となるプログラム要素-、日本地域看護学会第16回学術集会、徳島、2013.8.4
④ 横山恵子、統合失調症の「家族による家族学習会」の実践がもたらすもの、日本精神保健福祉学会第 2 回学術研究集会、さいたま市、2013.6.28
⑤ 横山 恵子、蔭山 正子、統合失調症の「家族による家族学習会」が精神障害者家族会に与える影響、日本精神保健看護学会第 23 回学術集会、京都、2013.6.16

〔図書〕（計１件）

① 飯塚壽美、伊藤順一郎、大島巌、岡田久実子、蔭山正子、柏木彰、倉澤政江、小林清香、佐藤美樹子、高森信子、中村由嘉子、貫井信夫、横山恵子、米倉令二、家族による家族学習会ガイド～精神障害をもつ方の家族のために～、地域精神保健福祉機構、2014、59

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等：なし

６．研究組織

(1)研究代表者

横山　恵子（YOKOYAMA, Keiko）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号：８０３２０６７０

(2)研究協力者

蔭山　正子（KAGEYAMA, Masako）
東京大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：８０６４６４６４

中村　由嘉子（NAKAMURA, Yukako）
名古屋大学・大学院医学研究科・研究員
研究者番号：６０６１４４８５

小林　清香（KOBAYASHI, Sayaka）
東京女子医科大学・医学部・臨床心理士
研究者番号：４０４３９８０７